

ソニー創業者の井深大は、戦後日本が科学技術で復興するためには、理科教育こそ重要だと考えていました。井深は日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを発売し、会社経営がようやく軌道に乗り始めた1959年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。

当時の贈呈式当日に、井深大から受賞校の先生方へ贈ったメッセージをご紹介します。

※内容および名称・肩書等は当時のものです。

第5回（1961年） ソニー小学校理科教育振興資金贈呈式

「国民すべてが科学を愛する心を」 井深大 ソニー株式会社社長（当時）

科学振興は国家的課題

ソニー小学校理科教育振興資金は、今回で第5回になりますが、応募されます内容も、年々あがってまいりました。このように、この計画が各地方地方において、小学校の理科教育の振興に少しでもお役に立っているのだと思うと、主催者としてこんなうれしいことはありません。今後ますます一生懸命にやってゆきたいという勇気が湧いてきます。

ご存知のように科学教育の重要性は、だんだんと世の中の大きな問題となり、国家的な問題となってきました。大学の定員の文科・理科の比を、現在の7対3から3対7にしようというような動きも、その現われであり、喜ばしいことだと思います。

しかし、ただ単に文科と理科の比が逆になったからといって、それですべてが解決するとは思いません。その中身が大切であります。本当に科学の好きな人たちが、本当の科学をめざして進んでくれてこそ、本当の科学の国になっていくのです。

科学への種子を子どもの心に

よく世間では早教育といって、音楽とか語学などは幼稚園などの小さい時分から教育をすれば、非常にいい素質を発揮するということが言われていますが、科学についても同じことが言えるのではないのでしょうか。

大学ではじめて科学的な教育を受け、それで立派な科学者がでてくることもありましようが、やはり国民全体に科学を楽しみ、科学を愛するという気持ちがわきあがってこそ、科学立国の実を求め得られると考えます。

そのためには、迂遠なようでも、やはり小学校、あるいはもっと小さいときから科学への種子を植えておくことが大切です。これを刈り入れるまでには、10年あるいは15年、20年かかるかもしれませんが、子どもたちに、本当の科学精神を植えておくことが基盤となります。

それに対して、このささやかな催しがどれだけお役にたっているかという事は疑問であります。この催しが刺激となり、発火点として少しでもお役にたてればと考えております。

小さな火の手が全国に燃え広がる

ある地方に受賞校ができますと、きまってその近辺の学校からいい論文が出てくるという経験を、この5回でしばしば味わいました。やはり、こういうことはいい学校に刺激され、見習っていくことによって、つぎの学校が燃え上ってくるものでしょう。

100万円を受賞された学校などでは、見学者で応接にいとまがないということをよく聞かれます。このようにわずらわしさもいとわず、つとめて学校を開放して、見学者を歓迎しておられる様子を聞くにつけて、小さい火の手がだんだんと日本中に燃え広がっていく喜びを感じずにはおれません。

小学校から始まった科学教育が、中学校、高等学校におよび、名実ともに科学の日本になりうる火の手を、このささやかな催しであげることができれば、こんなうれしいことはありません。

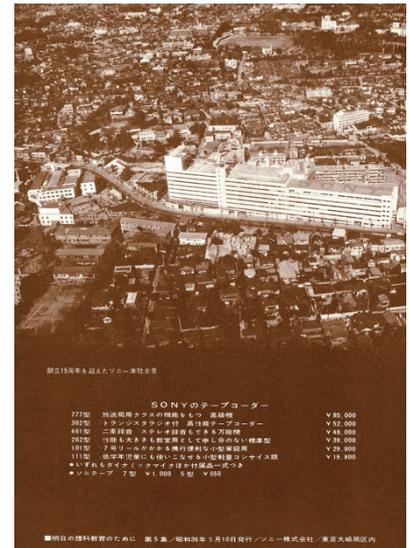
応募論文を読ませていただいて、みなさんのご努力に涙の出る思いがいたしましたが、これが、さらに燃えあがり、他の学校への刺激となっていくことを心から願わずにはおれません。

そして、われわれのささやかな催しがこのように理科教育振興に努力しているPTAや先生がたを勇気づける一つの要素となったならば、われわれの願いは達せられたと思います。

このような優れた成果を生んだご努力に対して、深く尊敬を表すとともに、今後ますます小学校科学教育振興のためにご精進くださって、科学振興の火の手が日本中に燃え広がっていくことを念願しております。

最後に審査に当たられた三先生^(※)に深く感謝の意を表します。審査員の先生方には、ひとりではかえきれないほどの論文の山を、一枚一枚慎重に読んでいただきました。非常にお忙しい中を、この審査に本気になって貴重な時間を与えてくださったことに熱くお礼を申し上げます。

※三先生： 当時の審査委員である茅誠司氏（東京大学学長）、篠原登氏（科学技術庁次官）、内藤誉三郎氏（文部省初等中等教育局長）のこと



「明日の理科教育のために 第5集
(昭和36年5月発行)」より